

## 土器と集団（三）：弥生時代前期の集団関係

田崎，博之  
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7183534>

---

出版情報：九州文化史研究所紀要. 35, pp.245-283, 1990-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# 土器と集団 (三)

—— 弥生時代前期の集団関係 ——

田 崎 博 之

## 目 次

はじめに

一 前田山遺跡と連ヶ遺跡の分析

① 遺跡の概要と周辺環境の検討

② 甕形土器の変遷 (以上第三十三号)

③ 住居遺構群の変遷過程

二 土器の変異と集団

① 土器の地域色の発現過程 (以上第三十四号)

② 土器の部分要素の変遷過程 (以下本号)

三 弥生時代前期の集団関係  
おわりに

## ② 土器の部分要素の変遷過程

前節では、土器の地域色のあらわれ方が、竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりごとに微妙に異なっ

土器と集団 (三)

いながらも、大枠では一定の共通性をもっていることを述べた。それは、土器様式の空間的な変異を生み出す基本的な単位を知る手掛りとなる。

ところで、蓬ヶ浦遺跡では、板付Ⅱ式土器中段階から須玖Ⅰ式土器古段階にむかい、甕形土器の主体が甕Aから甕Bへと移り変わるといふ、土器様式の時間的な変化がみられる。それを住居遺構群のまとまりごとにとみると、一―二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりごとに変化があらわれているが、B群やC群といったより大きな枠組みで共通した変化の傾向がみられる。しかし、この変化は、蓬ヶ浦遺跡を含む北部九州地方でも西半部の土器の地域色でもある。北部九州地方全域で共通し、時間の変化をあらわす土器の部分要素を取り出して検討してみよう。

さて、北部九州地方の弥生時代前期から中期の土器の時間的な変化は、甕形土器の底部によくあらわれていると言われてきた<sup>2)</sup>。薄い安定感のある平底から腰高の厚い上げ底への変化である。それとともに、胴部下半から底部の外観、そして器形全体は大きく変化する。それは、北部九州地方の全域で共通してみられる甕形土器の時間的な変化でもある。ここでは、そうした甕形土器の胴部下半から底部の形状を、時間的な変化をあらわしている部分要素として取り上げてみよう。

本稿では、板付Ⅱ式土器古段階―須玖Ⅰ式土器古段階の甕形土器の変遷過程をみた時、器面調整による微妙な凹凸を無視した胴部下半―底部の形状を、底部a―底部gに区分した。底部a―gは、第17―20図のように時間的に細かな形状を変化させている。ただし、前田山遺跡では、板付Ⅱ式土器古段階―中段階の資料が少ないので、第17・18図には葛川遺跡と下稗田遺跡の資料を補っている。

底部a：広めの安定感のある平底から緩やかにふくらむ胴部下半へとつづくもので、板付Ⅱ式土器古段階と中段階に見られる(第17図1・2、第19図1―3)。

底部b：底部aと同じく安定感のある平底をもつが、胴部下半が、直線的にすばまる。板付Ⅱ式土器古段階と中段

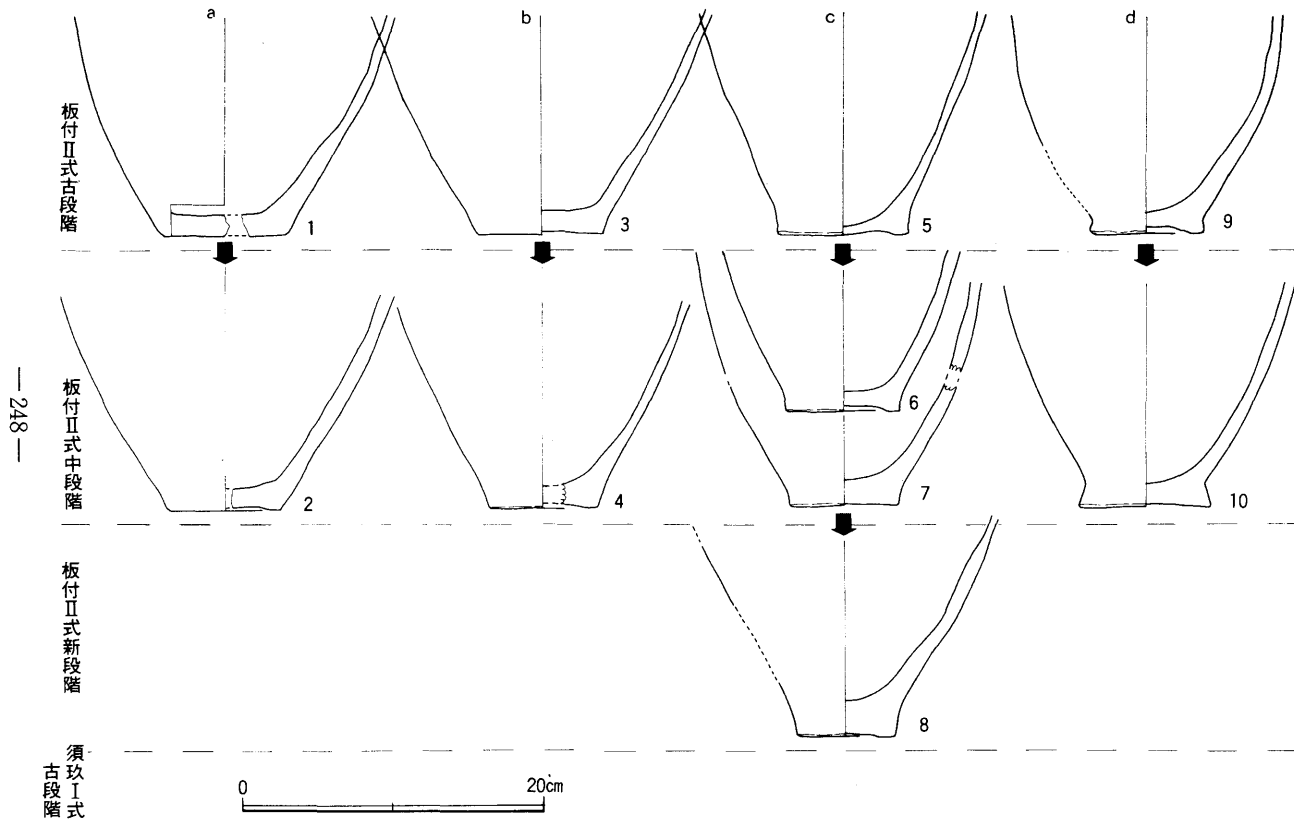
階に見られる。前者と比べ後者は、底径が若干小さく、胴部下半はあまりひろがらず、細身のプロポーションを呈する(第17図3・4、第19図4・7)。

底部c: 底部a・bと同じく薄での平底で、底部側面が内彎してすぼまり、細身の胴部下半を呈する。板付Ⅱ式土器古段階―新段階にみられる。古段階のものが、胴部径と比べ底径が大きく安定した平底であるのに対して、中段階―新段階のものは、底径が小さく胴部下半から底部にかけての変換点付近で強く内彎する。とくに、新段階のものは、古―中段階のものと比べ、若干厚底化し、器形全体として腰の高いプロポーションをもつ(第17図5・8、第19図8・13)。

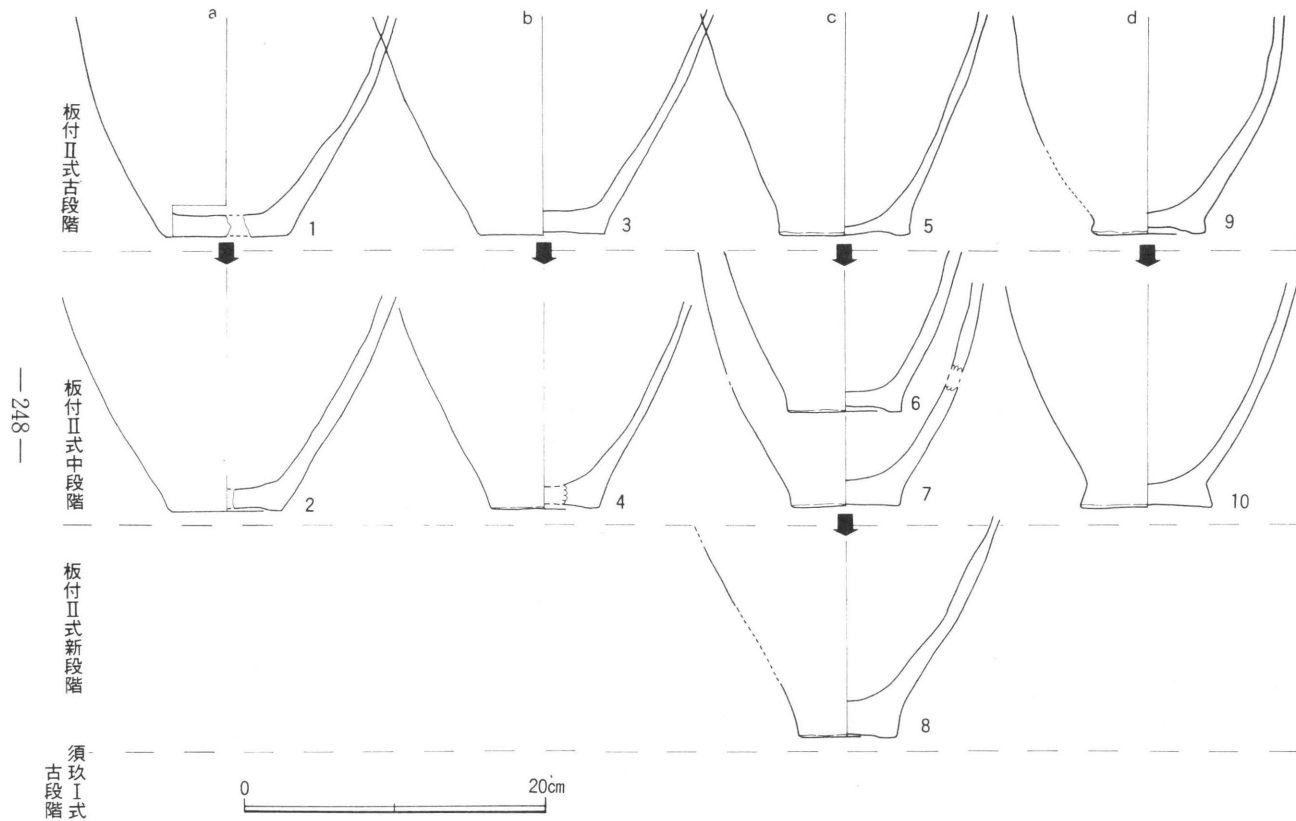
底部d: 胴部下半がふくらみながら、あるいはほぼ直線的にすぼまり、底部裾が「ハ」字状に張り出す。底部dは、葛川・下稗田・前田山遺跡では板付Ⅱ式土器新段階に姿を消すのに対して、蓬ヶ浦遺跡では須玖Ⅰ式土器古段階まで継続してみられる。これは北部九州地方でも東半部と西半部との地域差である。板付Ⅱ式土器古段階のものは、底部裾の張り出しが小さく、薄での平底である。中段階のものは裾の張り出しが目立ち、ふんばつたようにふくらみをもつ。板付Ⅱ式土器新段階―須玖Ⅰ式土器古段階のものは、厚底化が著しく、器形全体は細身のプロポーションを呈する(第17図9・10、第19図14・19)。

底部e: 底部dや後述の底部gのように、底部裾が張り出さず、ほぼ垂直に立ち上がるもので、器形全体のプロポーションは、細身に腰が高い。板付Ⅱ式土器中段階―須玖Ⅰ式土器古段階にみられる。板付Ⅱ式土器中段階のものは、底部の立ち上がりは短く、底部cにちかい。新段階のものは、厚い上げ底で、器形全体のプロポーションは腰高で無花果状である。こうした傾向は、須玖Ⅰ式土器古段階にはいっそう強まる(第18図11・15、第20図20・23)。

底部f: 胴部下半から底部にかけての変換点付近でくびれ、底部裾が張り出す。板付Ⅱ式土器中段階―須玖Ⅰ式土器古段階にみられる。板付Ⅱ式土器中段階のものは、くびれの度合が小さく、底部cもしくは底部dにちかい。板付Ⅱ式土器新段階―須玖Ⅰ式土器古段階のものは、厚底化が著しく、裾の張り出しが目立ち、くびれの度合も大きい。



第17図 底部 a~g の変化① (前田山、下稗田、葛川遺跡の場合 縮尺1/5)



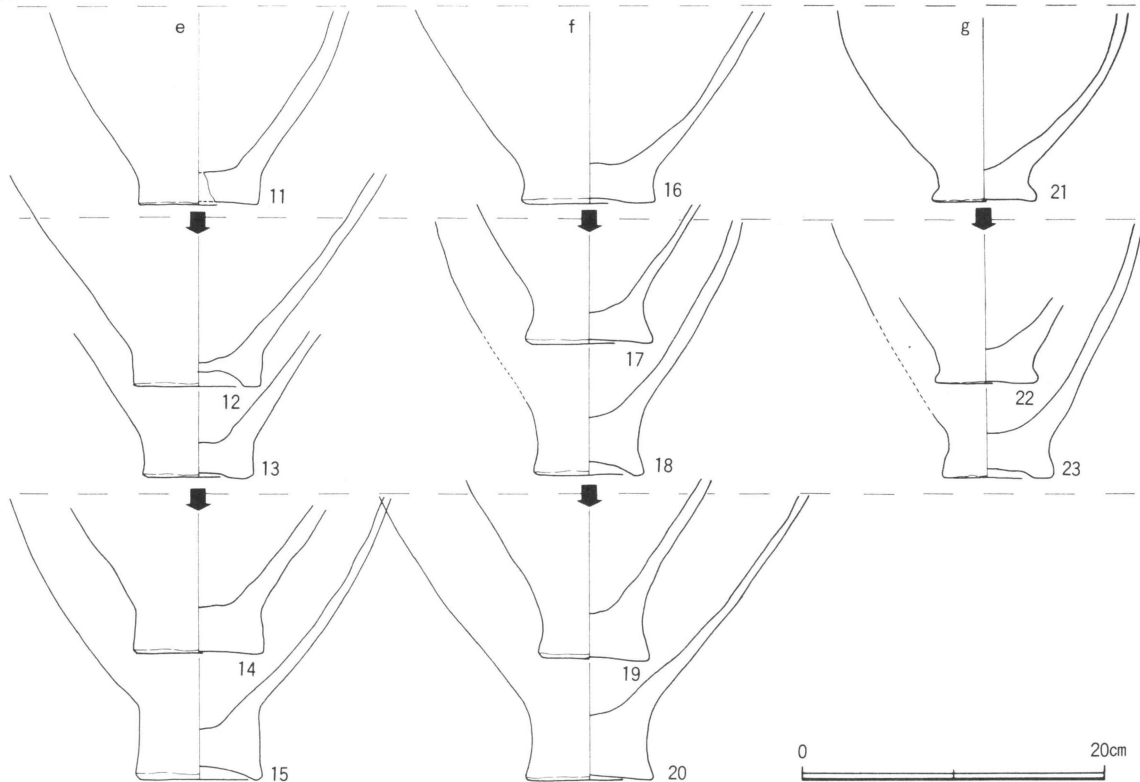
第17図 底部 a~g の変化① (前田山、下稗田、葛川遺跡の場合 縮尺1/5)

板付Ⅱ式  
古段階

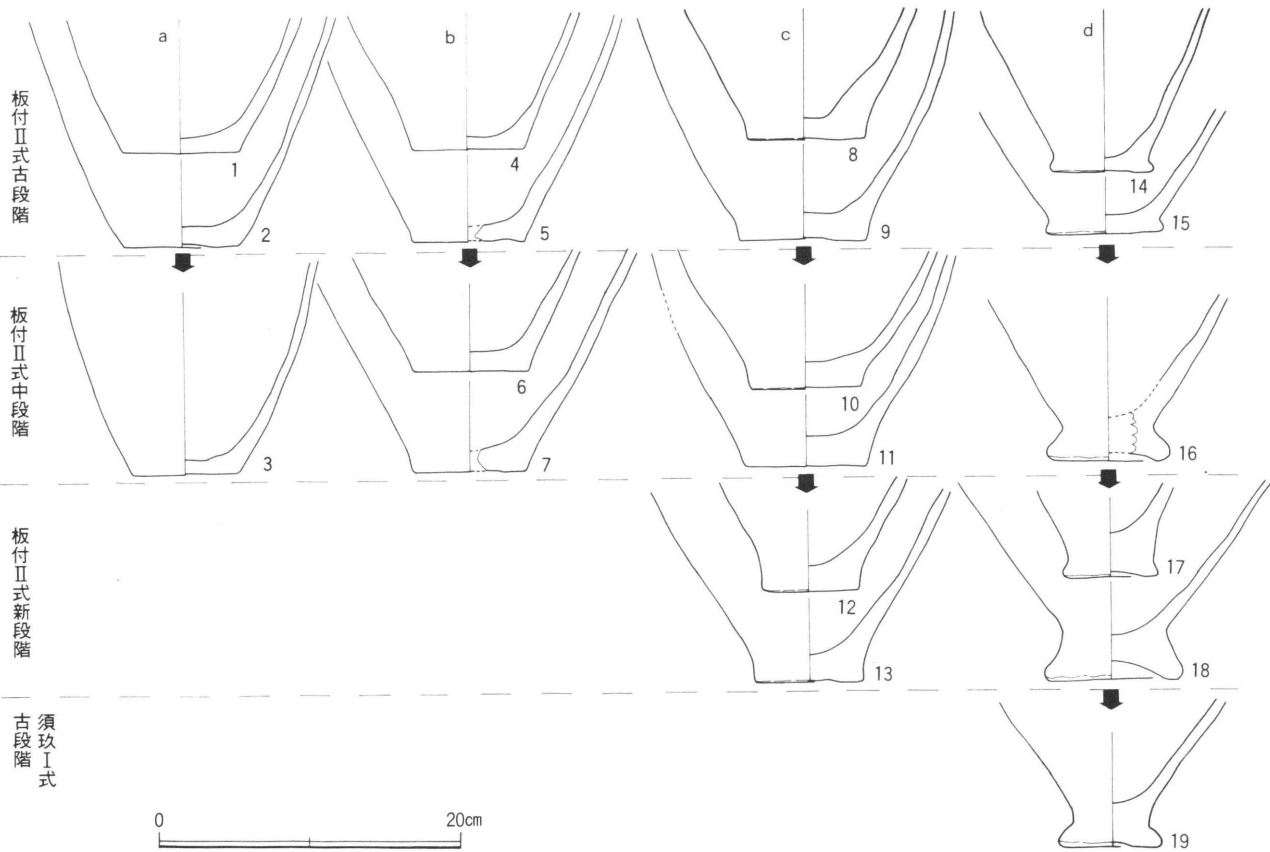
板付Ⅱ式中段階

板付Ⅱ式新段階

須玖Ⅰ式古段階



第18図 底部 a~g の変化② (前田山、下稗田、葛川遺跡の場合 縮尺1/5)



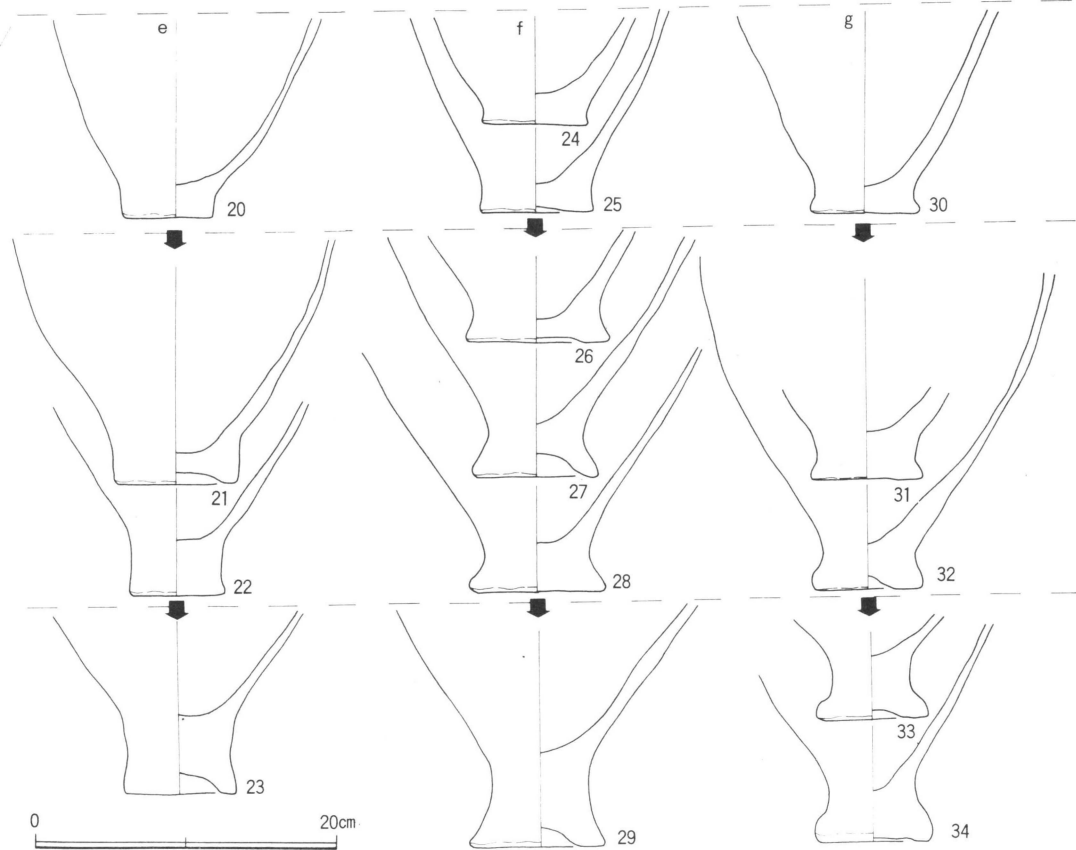
第19図 底部 a~g の変化③ (蓬ヶ浦遺跡の場合 縮尺1/5)

板付Ⅱ式  
古段階

板付Ⅱ式中段階

板付Ⅱ式新段階

須玖Ⅰ式古段階



第20図 底部 a~g の変化④ (蓮ヶ浦遺跡の場合 縮尺1/5)

器形全体のプロポーションは、底部eと同じく腰高で無花果状である(第18図16、20、第20図24、29)。

底部g:底部fと同じく底部の上方でくびれるが、裾が底部dのようにふんばり気味に張り出す。底部dと同じく、葛川・下稗田・前田山遺跡では、板付Ⅱ式土器中段階、新段階にみられるが、蓬ヶ浦遺跡では須玖Ⅰ式土器古段階までみられる。これも北部九州地方西半部と東半部とでの地域差である。板付Ⅱ式土器中段階のものは、底部の上方のくびれが小さく底部dにちかい。板付Ⅱ式土器新段階のものは、厚底で、くびれの度合が大きく裾の張り出しもつよい。こうした傾向は、須玖Ⅰ式土器古段階に、さらに著しい。器形全体のプロポーションは、底部e・fと同じく腰高で無花果状である(第18図21、23、第20図30、34)。

以上の底部a、gの中で、底部a、cは、形状的に類似しており、一群として大きくまとめられる。これらは、時間的に先行する板付Ⅰ式土器の甕形土器にもみられる。また、底部d・gも一群としてまとめられ、先行の夜臼式土器に代表される凸帯文土器の甕形土器と共通している。底部e・fは、須玖Ⅰ式土器中段階以降の甕形土器へとひきつがれるもので、板付Ⅱ式土器中段階に登場するが、底部cと底部dの両者と共通する形状をもち、板付Ⅱ式土器古段階、須玖Ⅰ式土器古段階には、底部a、cの一群と底部d・gの一群との中間的な位置付けができる。そして、以上の底部a、gの時期ごとの存否関係を見ると、底部a、cが底部e、gにとつてかわられる時間的な変化傾向が認められる(第1表)。さらに、遺跡ごとの出土比率をみても、底部a、cが次第に少なくなり、かわって底部f・gが多くなる(第21図①・②<sup>(28)</sup>)。

では、前田山遺跡と蓬ヶ浦遺跡とで、こうした底部a、gの時間的な変化は、どのようにあらわれているのであろうか。

第1表 底部a~gの時期ごとの存否

①前田山・葛川・下稗田遺跡

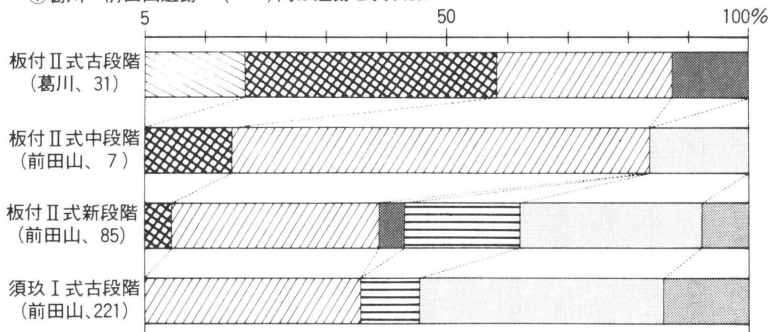
時期	底部形状						
	a	b	c	d	e	f	g
板付Ⅱ式古段階	○	○	○	○	x	x	x
板付Ⅱ式中段階	○	○	○	○	○	○	○
板付Ⅱ式新段階	x	x	○	x	○	○	○
須玖Ⅰ式古段階	x	x	x	x	○	○	x

②蓬ヶ浦遺跡

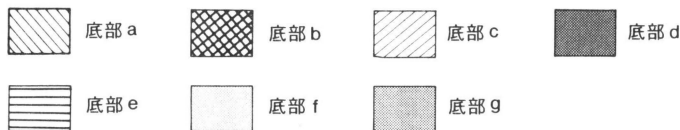
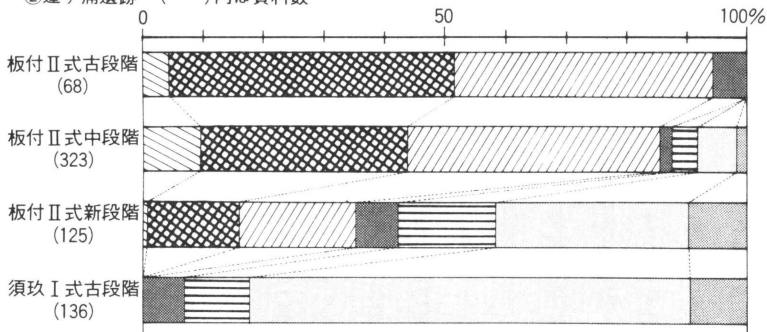
時期	底部形状						
	a	b	c	d	e	f	g
板付Ⅱ式古段階	○	○	○	○	x	x	x
板付Ⅱ式中段階	○	○	○	○	○	○	○
板付Ⅱ式新段階	x	x	○	○	○	○	○
須玖Ⅰ式古段階	x	x	x	○	○	○	○

(○有 x無)

①葛川・前田山遺跡 ( )内は遺跡と資料数



②蓬ヶ浦遺跡 ( )内は資料数



第21図 底部a~gの時期ごとの出土比率

## a 前田山遺跡Ⅱ地区での底部 a ⅰ g

前田山遺跡Ⅱ地区で遺構にともなう甕形土器の底部の資料は、総数三一三点を数える。しかし、板付Ⅱ式土器古段階の遺構はなく、中段階の資料も七点と極端に少ない(第3表①)。そのため、板付Ⅱ式土器新段階より以降を検討の対象とした。

まず、前田山遺跡での底部 a ⅰ g の出土数を、竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりごとに分割表に整理した(第3表②・⑤)。この表をみると、一見底部 a ⅰ g の出土度数が、住居遺構群のまとまりごとに違っているようにみえる。つまり、出土分布の偏りがあるようにみえる。しかし、それは、本当に違いと言ってよいのであろうか。そこで、それを判断する一つの手段として、統計学の仮説検定の手法を使ってみよう。ここで採用するのは、分割表

の適合度検定である。

適合度検定は、母集団から  $n$  個の個体を抽出して、それらを特性 A で  $1 \sim a$  類に、特性 B で  $1 \sim b$  類に分類し、第2表の  $a \times b$  の分割度数表が得られたとする時、

仮説

$H_0: \dots$  特性 A と B とは独立である。

が正しいとした場合、各セル(項)にはいることが期待される度数(期待度数)と、出土度数がどれくらい適合しているかで、仮説  $H_0$  を棄却したりしなかったりする検定である。出土度数と期待度数の適合度、つまりズレの大きさをあらわす尺度としては、次ページの式(1)が用いられる。この適合度を  $Z$  とあらわす。

本稿では、母集団から抽出される  $n$  個の個体とは、甕形土器の底部の出土数である。特性 A とは、甕形土器の胴部下半から底部の形状の分類であり、特性 B は

第2表 特性 A・B による  $a \times b$  の分割表

B \ A	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	B <sub>3</sub>	.....	B <sub>b</sub>	合計
A <sub>1</sub>	f <sub>11</sub>	f <sub>12</sub>	f <sub>13</sub>	.....	f <sub>1b</sub>	f <sub>1.</sub>
A <sub>2</sub>	f <sub>21</sub>	f <sub>22</sub>	f <sub>23</sub>	.....	f <sub>2b</sub>	f <sub>2.</sub>
A <sub>3</sub>	f <sub>31</sub>	f <sub>32</sub>	f <sub>33</sub>	.....	f <sub>3b</sub>	f <sub>3.</sub>
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
A <sub>a</sub>	f <sub>a1</sub>	f <sub>a2</sub>	f <sub>a3</sub>	.....	f <sub>ab</sub>	f <sub>a.</sub>
合計	f <sub>.1</sub>	f <sub>.2</sub>	f <sub>.3</sub>	.....	f <sub>.b</sub>	n

## 〈適合度検定にかかわる計算式〉

$$\text{式(1)} \quad \sum_{i=1}^k \frac{(\text{出土度数}-\text{期待度数})^2}{\text{期待度数}}$$

$$\text{式(2)} \quad H: P_{ij} = \tau_i \eta_j \quad i=1, 2, 3, \dots, a; \quad j=1, 2, 3, \dots, b$$

$$\text{式(3)} \quad E_{ij} = n \tau_i \eta_j$$

$$\text{式(4)} \quad \hat{\tau}_i = \frac{f_{i.}}{n} \quad i=1, 2, 3, \dots, a,$$

$$\text{式(5)} \quad \hat{\eta}_j = \frac{f_{.j}}{n} \quad i=1, 2, 3, \dots, b,$$

$$\text{式(6)} \quad E_{ij} = n \hat{\tau}_i \hat{\eta}_j = \frac{f_{i.} f_{.j}}{n}$$

$$\text{式(7)} \quad Z = \sum_{i=1}^a \sum_{j=1}^b \frac{(f_{ij} - E_{ij})^2}{E_{ij}}$$

$$\text{式(8)} \quad w: Z > \chi^2(k-r-1, \alpha)$$

$$\text{式(9)} \quad k-r-1 = ab - |(a-1) + (b-1)| - 1 = (a-1)(b-1)$$

$$\text{式(10)} \quad w: Z > \chi^2((a-1) + (b-1), \alpha)$$

式(11) 第3表-③におけるII B群の底部fの期待度数

$$\text{期待度数} = \frac{24 \times 33}{85} = 9.32$$

式(12) 第3表-③・④から計算される適合度Z

$$\begin{aligned} Z = & \frac{(5-5.35)^2}{5.35} + \frac{(2-1.68)^2}{1.68} + \frac{(2-2.30)^2}{2.30} + \frac{(4-3.67)^2}{3.67} \\ & \frac{(17-13.59)^2}{13.59} + \frac{(4-4.27)^2}{4.27} + \frac{(4-5.82)^2}{5.82} + \frac{(8-9.32)^2}{9.32} \\ & \frac{(4-7.00)^2}{7.00} + \frac{(4-2.20)^2}{2.20} + \frac{(5-3.00)^2}{3.00} + \frac{(4-4.80)^2}{4.80} \\ & \frac{(9-9.06)^2}{9.06} + \frac{(1-2.85)^2}{2.85} + \frac{(4-3.88)^2}{3.88} + \frac{(8-6.21)^2}{6.21} = 7.73 \end{aligned}$$

$$\text{式(13)} \quad \chi^2((4-1)(4-1), 0.05) = \chi^2(9, 0.05) = 16.92$$

その個体が出土した竪穴住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりである。そして、仮説H<sub>0</sub>とは、

H<sub>0</sub>……底部a∩g

は竪穴式住居跡を中心とした住居遺構群のまとまりごとに出土差がない(つまり、出土分布に偏りはない)。

ということになる。そして、Zの値が大きければ、仮説H<sub>0</sub>は棄却され、底部a∩gは竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりごとの出土分布に有意の偏りがあると考えられる。

次に、各セル(項)に

はいる期待度数は、一つの個体がセル (A<sub>i</sub>, B<sub>j</sub>) に属する確率を  $\pi_{ij}$  とおくと、仮説  $H_0$  は前ページの式 (2) ともあらわすことができる。ここで、 $\tau_1$  は特性 A がカテゴリ A に属する確率、 $\eta_1$  は特性 B がカテゴリ B に属する確率である。それらの総和は、 $\tau_1 + \tau_2 + \tau_3 + \dots + \tau_r$ 、 $\eta_1 + \eta_2 + \eta_3 + \dots + \eta_{b-1}$  である。したがって、 $H_0$  が正しいとした時のセル (A<sub>i</sub>, B<sub>j</sub>) の期待度数を  $\pi_{ij}$  とすると、式 (3) とあらわされる。 $\tau_1$  と  $\eta_1$  は未知であるから、データから推定する必要がある。 $\tau_1$  と  $\eta_1$  はそれぞれ、式 (4)、(5) で推定される。したがって、式 (3) より、セル (A<sub>i</sub>, B<sub>j</sub>) の期待度数  $\pi_{ij}$  は、式 (6) とあらわすことができる。したがって、出土度数と期待度数との適合度 Z は、式 (7) とあらわせる。ところで、抽出した個体数 n が大きいとき、Z は近似的に自由度  $k-r-1$  のカイ二乗分布をするとされている。これと比較して Z の値が大きいか小さいかをみることになり、仮説  $H_0$  の有意水準  $\alpha$  の検定で、仮説  $H_0$  を棄却する条件は式 (8) として与えられる。

ここで r は、仮説  $H_0$  での期待度数を求めるのにデータから推定した未知母数である。この未知母数は、 $\tau_1 \cdot \tau_2 \cdot \tau_3 \cdot \dots \cdot \tau_{r-1} \cdot \eta_1 \cdot \eta_2 \cdot \eta_3 \cdot \dots \cdot \eta_{b-1}$  の (r-1) + (b-1) 個である。したがって、カイ二乗分布の自由度は式 (9) となる。これを式 (8) に代入し、式 (10) が得られる。この式 (10) は、仮説  $H_0$  が真であるにもかかわらず、これを確率  $\alpha$  で棄却する条件である。つまり、式 (10) が満足されれば、仮説  $H_0$  は棄却され、満足されなければ棄却されない。

ただし、Z の分布は近似理論の関係で、各セルでの期待度数が 5 以上であることが望ましい。しかし、後述するように前田山遺跡や蓬ヶ浦遺跡では、この条件を満たさないことがある。その場合には、この条件をできるだけ満たすようにセルを統合して期待度数を計算した。たとえば、前田山遺跡の板付Ⅱ式土器新段階の場合では、後述するように系譜関係の近い底部 b・c、底部 d・g、そして底部 e、底部 f の四つにまとめて、期待度数を計算した。

第3表 前田山遺跡での底部a~gの出土度数および期待度数表

## ①板付Ⅱ式土器中段階における底部a~gのⅡB・ⅡD群ごとの出土度数

小群	出土遺構	底部a	底部b	底部c	底部d	底部e	底部f	底部g	合計
ⅡB群	F-41・46・60・67、P-6	0	1	5	0	0	0	0	6
ⅡD群	F-134	0	0	0	0	0	1	0	1
合計		0	1	5	0	0	1	0	7

## ②板付Ⅱ式土器新段階における底部b~gのⅡA~ⅡD群ごとの出土度数(1)

小群	出土遺構	底部b	底部c	底部d	底部e	底部f	底部g	合計
ⅡA群	F-5・7・10・13・14・16・22	0	5	0	2	4	2	13
ⅡB群	F-28・31・37・40・47~49・56、J-19	3	14	2	4	8	2	33
ⅡC群	F-61・62・68・70・89・90・92・93、P-21	1	3	2	5	4	2	17
ⅡD群	F-104・107・108・111・113・116・124・131・133	0	9	0	4	8	1	22
合計		4	31	4	15	24	7	85

## ③板付Ⅱ式土器新段階における底部a~gのⅡA~ⅡD群ごとの出土度数(2)

小群	底部b+c	底部d+g	底部e	底部f	合計
ⅡA群	5	2	2	4	13
ⅡB群	17	4	4	8	33
ⅡC群	4	4	5	4	17
ⅡD群	9	1	4	8	22
合計	35	11	15	24	85

## ④③が計算された期待度数表

小群	底部b+c	底部d+g	底部e	底部f	合計
ⅡA群	5.35	1.68	2.30	3.67	13.00
ⅡB群	13.59	4.27	5.82	9.32	33.00
ⅡC群	7.00	2.20	3.00	4.80	17.00
ⅡD群	9.06	2.85	3.88	6.21	22.00
合計	35.00	11.00	15.00	24.00	85.00

## ⑤須玖Ⅰ式土器古段階における底部c・e・f・gのⅡA~ⅡD群ごとの出土度数

小群	出土遺構	底部c	底部e	底部f	底部g	合計
ⅡA群	F-1~4・6・8・9・23、J-4、P-5	18	3	13	2	36
ⅡB群	F-44・45・52・57・58、P-13	25	12	14	8	59
ⅡC群	F-63~65・69・76・78・83・87・94	9	8	14	5	36
ⅡD群	F-105・110・112・114・129・130・132・135~138・140	21	24	29	16	90
合計		73	47	70	31	221

## ⑥⑤から計算された期待度数

小群	底部c	底部e	底部f	底部g	合計
ⅡA群	11.89	7.66	11.40	5.05	36.00
ⅡB群	19.49	12.54	18.69	8.28	59.00
ⅡC群	11.89	7.66	11.40	5.05	36.00
ⅡD群	29.73	19.14	28.51	12.62	90.00
合計	73.00	47.00	70.00	31.00	221

では、前田山遺跡の板付Ⅱ式土器新段階と須玖Ⅰ式土器古段階での底部 a ~ g のあり方をみてみよう。まず、板付Ⅱ式土器新段階には、底部 a は出土しておらず、胴部下半から底部の形状は底部 b ~ g の六類である。また、竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまともりは、前述したようにⅡA群 ~ ⅡD群の四群で、基本的には一 ~ 二軒の竪穴式住居跡を含む。つまり、第3表②のように、6×4の分割表が作られる。この時の仮説H<sub>0</sub>は、

H<sub>0</sub>……底部 b ~ g はⅡA群 ~ ⅡD群ごとに出土差(分布の偏り)はない。

である。この仮説を検定する手順としては、まず第3表②から期待度数を計算する。しかし、各セル(項)にはいる期待度数を計算すると、5以下になるものが多い。そこで、系譜関係の近い底部 b・c と底部 d・g、そして底部 e、底部 f にまとめて、第3表③のように4×4の分割表を作る。この時、各セルにはいる期待度数の計算は、式(6)から、たとえば、ⅡB群の底部 f の場合、式(11)のように、 $9.33$ の値が得られる。そして、出土度数と期待度数の適合度をあらわすZは、式(7)から式(12)として計算され、 $Z = 7.73$ の値が得られる。

一方、仮説H<sub>0</sub>が真にもかかわらず、これを確率0.05で棄却する棄却域は、第2表の式(9)から式(13)となる。これでカイ二乗分布表を参照し、 $\chi^2(9, 0.05) = 16.92$ という値が得られる<sup>50)</sup>。この値とZの値を較べると、式(10)の仮説H<sub>0</sub>を棄却する条件は満足されない。つまり、仮説は棄却されない。したがって、底部 b ~ g はⅡA群 ~ ⅡD群ごとに出土分布の有意な偏りがあるとは言えない。

次に、須玖Ⅰ式土器古段階の場合をみてみよう。この時、胴部下半から底部の形状は底部 c・e・f・g の四類であり、竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまともりはⅡA群 ~ ⅡD群の四群である。第3表⑤・⑥から  $Z = 10.8$  の値がえられる。また、カイ二乗分布表の中で  $\chi^2(9, 0.05) = 16.92$  となり、確率0.05で仮説を棄却する条件は満たされない。つまり、板付Ⅱ式土器新段階同様に、底部 c・e・f・g はⅡA群 ~ ⅡD群の四群ごとの出土分布には有意な偏りがあるとは言えない。

以上の、統計学の仮説検定から、前田山遺跡では、板付Ⅱ式土器新段階→須玖Ⅰ式土器古段階を通じて、底部b→gは、ⅡA群→ⅡD群といった一→二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりごとに、有意な分布の偏りがあるとは言えない。

b 蓬ヶ浦遺跡での底部a→g

では、蓬ヶ浦遺跡ではどうか。蓬ヶ浦遺跡では遺構にともなう甕形土器の底部資料は、総数六五二点である。まず、一→二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりが、単独あるいは複数集まって構成されるB・C・E・G群という大群ごとに、底部a→gの出土分布に偏りがあるかどうかを考えてみよう。ところが、第4表①に示したように、板付Ⅱ式土器古段階には、B群を除きC・E・G群での底部資料の出土度数は10以下である。そのため、各群ごとの底部a→gの出土度数の差、つまり出土分布の偏りを検討することができない。

次に、板付Ⅱ式土器中段階には、第4表②のように、E群での資料が8点と少ない。また、底部dと底部gは、B・C・G群でも少ない。そのために、E群を除き、底部d・gを一類にまとめて、3×6の出土度数分割表の第4表③を作成した。この表で適合度の仮説検定を行うこととした。ここでの仮説 $H_0$ は、

$H_0$ ……底部a・b・c・d+g・e・fはB・C・G群の三つの群ごとに出土差(分布の偏り)はない

である。つづいて、第4表③から期待度数を求めたのが第4表④である。この二つの表から計算される出土度数と期待度数の適合度は、 $Z \parallel 24.65$ である。一方、カイ二乗分布表で $\chi^2(10, 0.05) \parallel 18.31$ である。したがって、10ページの式(10)は満足されることとなり、仮説 $H_0$ は棄却される。したがって、底部a・b・c・d+g・e・fは、B・C・G群の三つの群ごとに有意な分布の偏りがあると判断される。こうした関係をあらわすために、出土度数から期待度数を差し引いた値をグラフ化したのが第22図①である。つまり、底部bはB群で、底部cはB群とG群で、底部fはC群で相対的に多いことがわかる。

第4表 蓬ヶ浦遺跡での底部a～gの出土度数表および期待度数表(1)

土器と集団  
(三)

①板付Ⅱ式土器古段階における底部a～gのB・C・E・G群ごとの出土度数

大群	出土遺構	底部a	底部b	底部c	底部d	底部e	底部f	底部g	合計
B群	J-4・6・7・15、D-1・10・13、P-3 F-2・5・7・20・23・29・34・50～52・ 78・82・94・95	2	24	22	3	0	0	0	51
C群	J-6 F-24・27・33・38・39	1	4	2	1	0	0	0	8
E群	J-3 F-9・11	0	2	1	0	0	0	0	3
G群	D-15 F-3・4	0	2	4	0	0	0	0	6
合計		3	32	29	4	0	0	0	68

②板付Ⅱ式土器中段階における底部a～gのB・C・E・G群ごとの出土度数

大群	出土遺構	底部a	底部b	底部c	底部d	底部e	底部f	底部g	合計
B群	J-1・3・5・9、D-2・3、P-1 F-3・4・21・25・26・35～37・39・42 45・49・54・59・74・75・77・80・ 87・88・93	19	82	90	7	7	7	3	215
C群	J-2、D-4・12 F-3・9・10・12・20・25・28・29・35・ 40・45・48	7	16	19	0	3	11	1	57
E群	J-1 F-1	0	2	6	0	0	0	0	8
G群	J-1・2 F-8・9・10・13・16	5	10	20	0	3	4	1	43
合計		31	110	135	7	13	22	5	323

③板付Ⅱ式土器中段階における底部a～gのB・C・G群の出土度数

大群	底部a	底部b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合計
B群	19	82	90	10	7	7	215
C群	7	16	19	1	3	11	57
G群	5	10	20	1	3	4	43
合計	31	108	129	12	13	22	315

④③から計算された期待度数

大群	底部a	底部b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合計
B群	21.16	73.71	88.05	8.19	8.87	15.02	215
C群	5.61	19.54	23.34	2.17	2.36	3.98	57
G群	4.23	14.75	17.61	1.64	1.77	3	43
合計	31	108	129	12	13	22	315

第5表 蓬ヶ浦遺跡での底部a~gの出土度数表および期待度数表(2)

## ①板付Ⅱ式土器新段階における底部a~gのB・C・E・G群ごとの出土度数

大群	出土遺構	底部a	底部b	底部c	底部d	底部e	底部f	底部g	合計
B群	J-2・8・10 F-1・9・18・69・70・83・89	0	5	9	4	18	18	7	61
C群	J-1, D-1 F-1・14・31・49・52	1	13	15	3	2	11	6	51
E群	F-4・7	0	0	0	2	0	3	1	6
G群	D-17 F-1・14・15	0	1	0	0	0	5	1	7
	合計	1	19	24	9	20	37	15	125

## ②板付Ⅱ式土器新段階における底部a~gのB・C群ごとの出土度数

大群	底部a+c	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合計
B群	5	9	11	18	18	61
C群	14	15	9	2	11	51
合計	19	24	20	20	29	112

## ③②から計算された期待度数

大群	底部a+b	底部c	底部a+b	底部e	底部f	合計
B群	10.35	13.07	10.89	10.89	15.8	61
C群	8.65	10.93	9.11	9.11	13.2	51
合計	19	24	20	20	29	112

## ④須玖Ⅰ式土器古段階における底部a~gのB・C・E・G群ごとの出土度数

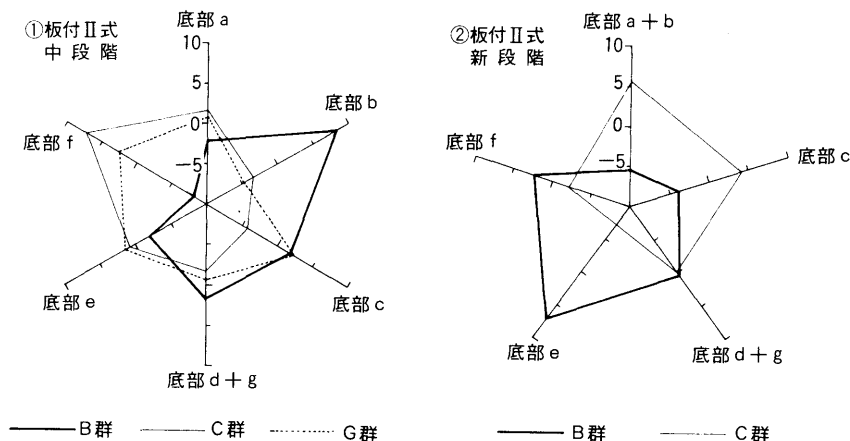
大群	出土遺構	底部a	底部b	底部c	底部d	底部e	底部f	底部g	合計
B群	J-11・12・14, D-4 F-6・11・17・19・24・33・53・55 65・68・73	0	0	0	4	9	45	7	65
C群	F-6~8・11・15・16・19・21・41 43・50・51・53	0	0	0	5	2	37	4	48
E群	F-8	0	0	0	0	0	1	0	1
G群	M-3・4 F-6・11・12	0	0	0	1	3	16	2	22
	合計	0	0	0	10	14	99	13	136

## ⑤須玖Ⅰ式土器古段階における底部d~gのB・C・G群ごとの出土度数

大群	底部d+g	底部e	底部f	合計
B群	11	9	45	65
C群	9	2	37	48
G群	3	3	16	22
合計	23	14	98	135

## ⑥⑤から計算された期待度数

大群	底部d+g	底部e	底部f	合計
B群	11.07	6.74	47.19	65
C群	8.18	4.98	34.84	48
G群	3.75	2.28	15.97	22
合計	23	14	98	135



第22図 蓬ヶ浦遺跡B・C・G群における底部a~g

板付Ⅱ式土器新段階ではどうであろうか。第5表①に  
しめした底部の出土度数をみると、底部aと底部dは少  
なく、またE・G群では出土度数が少ない。そこで、ここ  
では、底部aを底部bと、底部dを底部gと一緒にまとめ  
て、B・C群で、第5表②の2×5分割表を作り、B群  
とC群ごとに出土度数の差がないという仮説を検定した。  
その結果、出土度数と期待度数の適合度は、 $Z = 19.74$ と  
の値が得られた。一方、カイ二乗分布表で $\chi^2(4, 0.05)$   
 $= 9.488$ である。したがって、前段階と同じく、仮説 $H_0$ は棄  
却され、底部a + b・c・d + g・e・fは、B・C群  
の間で有意な出土分布の偏りがあると判断される。こうし  
た関係をあらわすために、出土度数と期待度数の差をグラ  
フ化して、第22図①に示したが、底部eと底部fはB群  
で、底部a + bと底部cはC群で相対的に多いことがわか  
る。

最後に、須玖Ⅰ式土器古段階の底部の出土度数を  
第5表④に示した。しかし、E群では、底部は1点しか  
出土しておらず、底部dの出土度数も少ない。ここでは、  
E群を除き、底部dと底部gとまとめ、第5表⑥の3×

第6表 蓮ヶ浦遺跡B・C群での底部a~gの出土度数表および期待度数表(1)

土器と集団  
(三)

①B群における底部a~gの時期ごとの出土度数

時 期	底部a+b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合 計
板付Ⅱ式中段階	101	90	10	7	7	215
板付Ⅱ式新段階	5	9	11	18	18	61
合 計	106	99	21	25	25	276

②①から計算された期待度数

時 期	底部a+b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合 計
板付Ⅱ式中段階	82.57	77.13	16.36	19.47	19.47	215
板付Ⅱ式新段階	23.43	21.87	4.64	5.53	5.53	61
合 計	106	99	21	25	25	276

③C群における底部a+gの時期ごとの出土度数

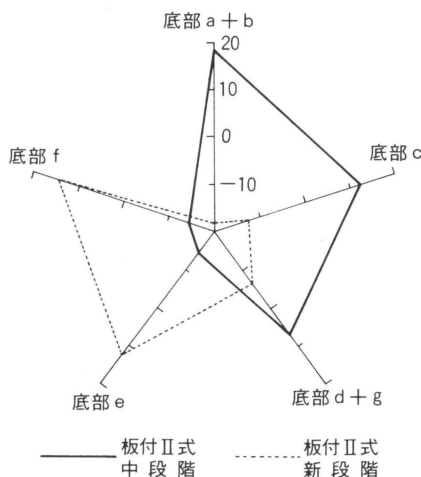
時 期	底部a+b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合 計
板付Ⅱ式中段階	23	19	1	3	11	57
板付Ⅱ式新段階	14	15	9	2	11	51
合 計	37	34	10	5	22	108

④③から計算された期待度数

時 期	底部a+b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合 計
板付Ⅱ式中段階	19.53	17.94	5.28	2.64	11.61	57
板付Ⅱ式新段階	17.47	16.06	4.72	2.36	10.39	51
合 計	37	34	10	5	22	108

3の分割表を作った。これから第5表―⑥の期待度数を求め、出土度数に差がないという仮説を検定した。その結果、適合度の値は、 $Z \parallel 3.23$ で、一方、カイ二乗分布表の $\chi^2(4, 0.05) \parallel 9.49$ である。したがって、仮説は棄却されず、須玖Ⅰ式土器古段階には底部d+g・e・fはB・C・G群の間で有意な出土分布の偏りがあるとは言えない。

以上のように、蓮ヶ浦遺跡では、板付Ⅱ式土器中段階―新段階では底部a+gはB・C群あるいはG群の間で有意な出土分布の差があり、須玖Ⅰ式土器古段階になると、そうした有意な差はみられなくなる。その中で、



第23図 蓬ヶ浦遺跡B群における板付Ⅱ式土器中～新段階の底部a～g

板付Ⅱ式土器中段階～新段階に底部a～gの出土分布に有意な差がみられるが、B・C・G群ごとでは時間的にどのような変化が生じているのであろうか。底部の出土数が比較的多いB・C群で、その変化の違いをみるために、再度、適合度検定を試みた。その場合、特性Aは胴部下半から底部の形状分類で、特性Bは時期である。ただし、底部aと底部dは出土数が少ないので、底部a + b・c・d + g・e・fの五類にまとめた。また、仮説 $H_0$ は、

$H_0: \dots$  底部 a + b・b・c・d + g・e・f は時期によって変化がない

である。これまでと同じ手順で、B・C群ごとに出土度数の分割表を作り、期待度数を計算した(第6表①～④)。その結果、B群では適合度の値は $Z = 11.74$ であり、一方、カイ二乗分布表で $\chi^2(4, 0.05) = 9.49$ の値を得た。つまり、 $H_0$ は棄却され、時期的に有意の変化が認められ、出土度数と期待度数との比較から、底部a + b・cから底部e・fへと変化していく姿が読み取れる(第23図)。ところが、C群では適合度は $Z = 8.96$ 、カイ二乗分布表で $\chi^2(4, 0.05) = 9.49$ であり、 $H_0$ は棄却されない。つまり、C群では板付Ⅱ式土器中段階から新段階になっても、ほぼ同様な底部a～gで構成されているといえる。C群で、底部e・fへの変化が生じるのは、底部a～cの姿が消える須玖Ⅰ式土器古段階で、B群と比較して一時期遅れることになる。

第7表 蓮ヶ浦遺跡B・C群での底部a～gの出土度数表および期待度数表(2)

①板付Ⅱ式土器中段階における底部b～gの  
B群東・西aパターンごとの出土度数

小群	底部 b+c	底部 d+g	底部e	底部f	合計
東側 aパターン	3	2	6	3	14
西側 aパターン	9	9	12	13	43
合計	12	11	18	16	57

②①から計算された期待度数

小群	底部 b+c	底部 d+g	底部e	底部f	合計
東側 aパターン	2.95	2.7	4.42	3.93	14
西側 aパターン	9.05	8.3	13.58	12.07	43
合計	12	11	18	16	57

③板付Ⅱ式土器中段階における底部a～gの  
C群南・北群ごとの出土度数

小群	底部a: +b+c	底部 d+g	底部e	底部f	合計
北群	7	3	1	2	13
南群	22	6	1	9	38
合計	29	9	2	11	51

④③から計算された期待度数

小群	底部a: +b+c	底部 d+g	底部e	底部f	合計
北群	7.39	2.29	0.51	2.8	13
南群	21.61	6.71	1.49	8.2	38
合計	29	9	2	11	51

⑤板付Ⅱ式土器新段階における底部a～gのB群東・西aパターンごとの出土度数

小群	底部a	底部b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合計
東側 aパターン	5	29	23	1	2	3	63
西側 aパターン	3	14	15	6	4	2	44
合計	8	43	38	7	6	5	107

⑥⑤から計算された期待度数

小群	底部a	底部b	底部c	底部d+g	底部e	底部f	合計
東側 aパターン	4.71	25.32	22.38	4.12	3.53	2.94	63
西側 aパターン	3.29	17.68	15.62	2.88	2.47	2.06	44
合計	8	43	38	7	6	5	107

⑦ ①②、③④、⑤⑥から計算された適合度Zおよびカイ二乗分布

	① ②	③ ④	⑤ ⑥
適合度Z	Z=1.27	Z=1.27	Z=8.74
カイ二乗分布	$\chi^2(3, 0.05)=7.81$	$\chi^2(3, 0.05)=7.81$	$\chi^2(5, 0.05)=11.07$

では、前田山遺跡Ⅱ地区でみたと同様に、一―二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりの間では、どうであろうか。ここでは、各大群の中で底部の出土数が比較的多い板付Ⅱ式土器中段階―新段階のB群の東西の二つのaパターンと、板付Ⅱ式土器中段階のC群の南北の二つのaパターンの間で、おのおの底部a―gの出土度数に差がないという仮説の検定を行った。出土度数と期待度数を第7表―①―⑥にしめたが、これから計算される出土度数と期待度数の適合度の値と、カイ二乗分布表から得られる値は、それぞれ第7表―⑦となる。これを見ると、いずれも適合度Zは小さく、仮説は棄却されない。つまり、各大群の中に含まれる一―二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりの間では、底部a―gの出土分布の差は有意のものとは言えない。

ところで、蓮ヶ浦遺跡のB群は、丘陵の一部分に住居遺構が集中するものの、竪穴式住居跡の数からいうと、前田山遺跡Ⅱ地区の全体に相当する。その点を考えれば、B群内で板付Ⅱ式土器中段階―須玖Ⅰ式土器古段階を通じて、東西の二つのaパターンの間で、底部a―gの出土分布に偏りが無いのは、前田山遺跡と同じであり、土器様式の時間的な変異は、一―二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりごとに個別的ではないことを示している。

### 三 弥生時代前期の集団関係

以上、甕形土器を選び、土器様式の中の空間的変異（地域色）と時間的変異が、遺跡の中でどのようにあらわれているのかをみてきた。その結果、土器様式の変異は、一―二軒の竪穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりの間で微妙に異なる場合もあるが、基本的には、それらが複集集合したまとまりごとに生じていることを捉えることができた。

さて土器様式は、当然、土器を作る個人や集団を反映している。したがって、土器様式の空間的・時間的な変異は、土器を作った個人や集団の変異として捉えることができる。つまり、一つの遺跡の中で、土器様式が同じ変異をみせ

る住居遺構群のまとまりは、共通した土器づくりの伝統をもつ小集団を意味している。また、逆に土器様式の変異が異なる住居遺構群のまとまりが存在するのならば、一遺跡内に異なる土器づくりの伝統をもつ小集団が併存していたと言えよう。また、土器づくりは、たんに粘土をこねて、器を作るだけではなく、粘土の採掘に始まり焼成作業にいたる一連のシステムである。そうした面からいうと、土器づくりの伝統を共有することは、土器づくりのシステムを共有し、土器づくりを共同して行っていた可能性もあらわしている。前述してきたように、土器様式の変異のあり方は、一つの集落遺跡の中で、時期ごとにも変化している。その変化を含めて、小集団の性格と相互の関係を復元することができよう。

ここでは、もう一度、住居遺構群の空間的な分布から、集落の景観と構成を整理し、土器様式の空間的・時間的な変異とあわせ、集落を営んだ小集団の姿と相互関係を考え、弥生時代前期の集団関係を考えてみよう。

#### a 単位世帯と複合世帯

我々が考古学的資料の中で「住む」という面から考える最少の単位は、一軒の住居であろう。前田山遺跡Ⅱ地区では、板付Ⅱ式土器中段階―新段階のⅡA―ⅡC群は、一軒の堅穴式住居跡を含むaパターンの住居遺構群に、bパターンあるいはcパターンが組み合い、一つのまとまりをつくっている。また、須玖Ⅰ式土器古段階のⅡB群は、一軒の堅穴式住居跡を含むaパターンの住居遺構群だけでまとまりを構成している。これらが、丘陵の各所に散在している景観が復元できる。蓬ヶ浦遺跡でも同様に、C・E・G群は、一軒の堅穴式住居跡を含むaパターンから構成されている。

こうした住居遺構群のまとまりの中には、堅穴式住居跡に加えて、それぞれ個々の袋状堅穴群を周辺に営んでいる。さらに破損した土器や石器などを廃棄した再利用の袋状堅穴や土壙がみられる。前田山遺跡Ⅱ地区では、ヤマトシジミ・マガキ・ハマグリ・イノシシ・シカをはじめとする貝類や獣魚骨などの食物残渣が捨てられた袋状堅穴や土壙がある。それらは、ⅡA―ⅡD群に平均的に分布する。この中で、ⅡB群内の堅穴式住居跡にともなう袋状堅穴ごとの貝類の

総個体数は似たような傾向をしめすが、他の群と比較すると、かなりのバラつきがある。貝類の採捕が各住居単位ごとに独自に行われていた可能性が指摘されている<sup>31)</sup>。

また、一軒の堅穴式住居跡を中心する住居遺構群のまとまりが分布する範囲は、堅穴式住居跡に住み、袋状堅穴を掘り食料や家財を貯え、使えなくなつた袋状堅穴や土壙に破損した土器や石器あるいは食物残滓を捨てるといふ日常生活全般が営まれた舞台である。それは、住居遺構群を営んだ小集団が独占的に占有する生活空間である。同じ丘陵上に複数の住居遺構群のまとまりが営まれていたとしても、個々の生活空間は互いに重複することはない。たとえば、前田山遺跡Ⅱ地区のⅡAⅠⅡ群は、常に一定の距離をおいて営まれている。蓬ヶ浦遺跡でも、板付Ⅱ式土器中段階に、C区の北側斜面に新たにaパターンの住居遺構群(C北群)が登場する。しかし、前段階からみられる南側斜面のaパターン(C南群)の住居遺構群の分布範囲が若干南へ移り、両者の生活空間は互いに重複することはない。こうしてみると、aパターンに含まれる一軒の堅穴式住居跡に住む小集団は、「住」生活をともにしているだけではなく、日常生活全般をともに営む最小の生活単位であつたと言えよう。

ところが、aパターンの中に二軒の堅穴式住居跡が同時に併存することがある。前田山遺跡Ⅱ地区では、須玖Ⅰ式土器古段階のⅡA群とⅡC群が、円形プランと方形プランの二軒の堅穴式住居跡を含んでいる。蓬ヶ浦遺跡でも、B群では各時期を通じて二軒の円形プランの堅穴式住居跡が同時併存する。こうした場合は、どのように考えればよいのであろうか。

その中で、二軒の堅穴式住居跡の規模が、大きく異なる場合がある。たとえば、前田山遺跡Ⅱ地区では、方形プランのものは一辺が三〜四メートル前後、円形プランのものは直径が五〜六メートルをはかる。蓬ヶ浦遺跡のB群でも、板付Ⅱ式土器古段階に、丘陵の中央部と南側斜面に二つのaパターンが営まれ、各aパターンでは直径七〜八メートルの大形の堅穴式住居跡と、四・五〜五・四メートルの小形のものが併存する。また、板付Ⅱ式土器中段階Ⅰ須玖Ⅰ

式土器古段階のB群の西側aパターンでも同様である。こうした二軒の配置関係をみると、蓬ヶ浦遺跡ではかなり接近して営まれ、前田山遺跡Ⅱ地区では、大形の円形プランのものがaパターンの中心部に、小形の方形プランのものは外縁近くに営まれている。周辺の袋状堅穴も、二軒にそれぞれ個別に伴うものはなさそうである。さらに、前田山遺跡Ⅱ地区で、貝類や獣魚骨が捨てられた袋状堅穴の分布やあり方も、aパターンに一軒の堅穴式住居跡が伴う場合と異なることはない。小形の堅穴式住居跡は、付加的な住居と考えてよさそうである。二軒は、「住む」という面では、それぞれ個別のものであっても、生活全般の中では二軒が一組となって経営されていたのである。これと同様に、二軒の規模に差がほとんどない場合も、一軒が付加的な住居であり、二軒一組で一つの生活単位をつくっていたと考えられる。

このように、板付Ⅱ式土器古段階―須玖Ⅰ式土器古段階の集落遺跡では、生活全般にわたる基本的な生活単位は、一軒の堅穴式住居跡を中心として構成される場合と、二軒一組からなる場合とがある。しかし、そのどちらの場合にせよ、堅穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりを営んだ小集団は、他とは重複しない生活空間を個別に占有し、それぞれ家財や食料を貯える袋状堅穴群をもつ。それは日常生活全般にわたる一つの生活単位であり、「世帯」と呼ぶにふさわしいであろう。そして、「住」生活の上で二者があることは、当然「世帯」の形に二者があることを意味している。ここでは、一軒の堅穴式住居跡を中心とする住居遺構群のまとまりを営んだ小集団を、「住」生活の単位と生活全般にかかわる生活単位とが一致する「単位世帯」、二軒一組を中心とするまとまりを営んだ小集団を、複数の「住」生活の単位を含むという意味から「複合世帯」と呼んでおこう。また、この二つの世帯の形は、一つの集落の中で同時に併存している。さらに、決して固定的なものではなく、時期によりその形を変化させることもある。たとえば、前田山遺跡Ⅱ地区のⅡA群とⅡC群は、板付Ⅱ式土器新段階まで「単位世帯」の形をとるが、須玖Ⅰ式土器古段階には「複合世帯」へと形を変える。蓬ヶ浦遺跡のB群の東側aパターンは、板付Ⅱ式土器中段階には「複合世帯」、板付Ⅱ式土

器新段階には「単位世帯」、そして須玖Ⅰ式土器古段階には再び「複合世帯」へと形を変えていく。

#### b 世帯と世帯群

一つの集落遺跡の中に、単位世帯と複合世帯という二つの世帯の形が併存する姿が復元できた。こうした世帯が一つの生活単位として自立的に生活を営む基盤の一つは、他の家族とは重複しない一定の範囲を、生活空間として独占到有していることである。そうした生活空間の占有を時間的な流れの中でトレースすると、集落遺跡の中で、単独あるいは複数の世帯が集合して、より高いレベルでのまとまりが捉えられる。土器様式の変異のあらわれ方とともに考えてみよう。

まず、蓬ヶ浦遺跡のE群やG群では、一軒の竪穴式住居跡を含むaパターンが、単独で板付Ⅱ式土器古段階から須玖Ⅰ式土器古段階に一定の場所に継続して営まれる。土器様式の空間的な変異をみると、E群やG群での甕Aと甕Bの出土比率は、他の群と異なっている。また、時間的な変異でも、甕Aから甕Bへの変換は独自の歩調をとる。資料数が少ないが、板付Ⅱ式土器中段階に甕形土器の底部a～gの中で底部cがB群と比べ相対的に多いなど、第22図①のように、個々の構成をとる、つまり、G群を営んだ世帯は、固有な土器づくりの伝統をもっていたことが推定される。こうした生活空間の継続的な占拠と土器様式の変異から、E群やG群を営んだ世帯は、同じ遺跡のB・C群に対して自立的な存在であったと言える。

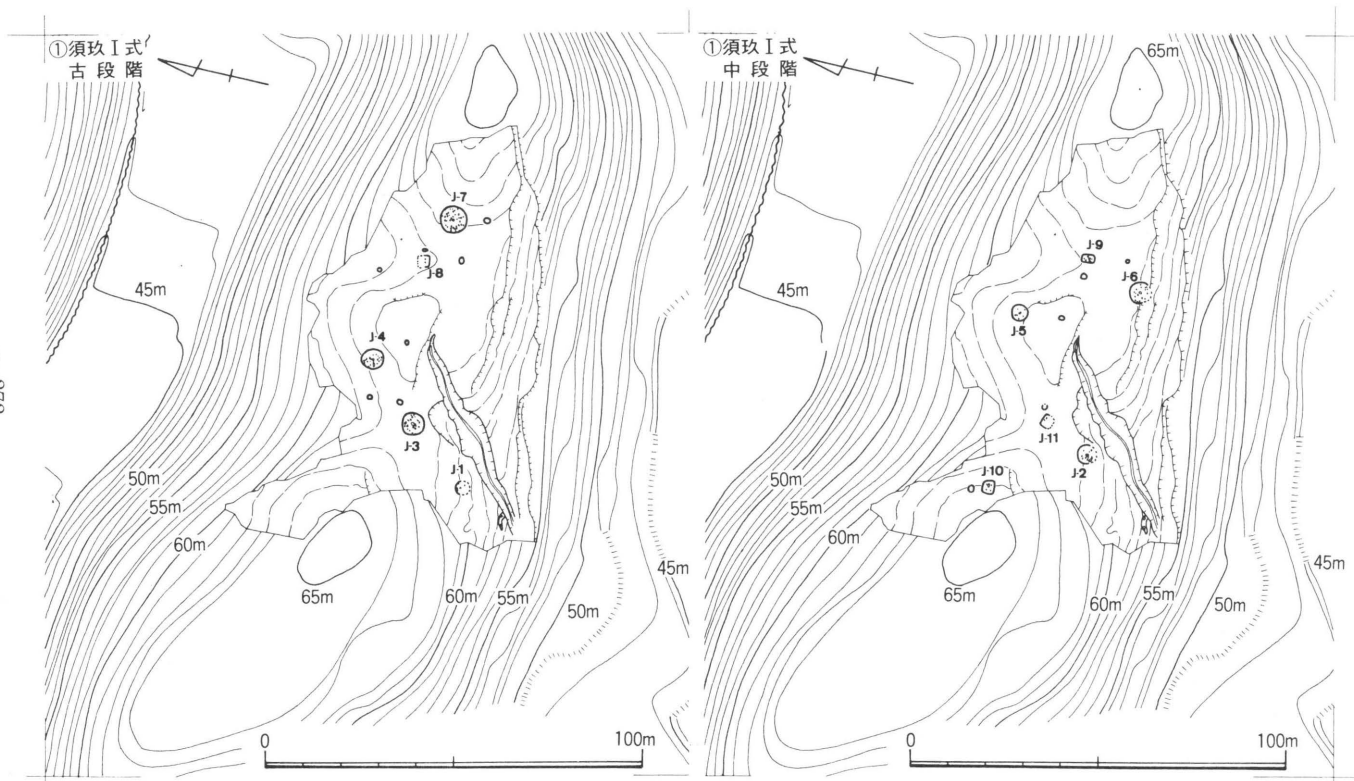
また、前述したように前田山遺跡Ⅱ地区のD群は、竪穴式住居跡が伴うか否か判断に苦しむ例である。土器様式の時間的な変異をあらわす甕形土器の底部b～gの出土分布にはD群と比べて有意な偏りはない。しかし、空間的な変異をあらわす甕Aと甕Bの出土比率は基本的にはD群と異なっている。さらに、D群には、外観が甕Aに酷似するが、口縁部の作り方は甕Bの範疇に含まれるもの(第15図16・7)がある。ところが、D群ではみられない。これらから、D群はD群から切り離して考えてよさそうである。その場合には、D群には各時期を通じて一ない

し二軒の竪穴式住居跡が営まれたと考えられ、蓬ヶ浦遺跡のE群やG群と同じく、単体で継続的に生活空間を占有し、固有の土器づくりの伝統をもつ世帯の姿が浮かび上がってくる。

こうした前田山遺跡Ⅱ群と蓬ヶ浦遺跡E・G群は、一世帯が集落遺跡の中で自立的・独立的な存在であったと考えられる。これに対して、前田山遺跡ⅡAⅠⅡ群は住居遺構の分布状態から、板付Ⅱ式土器中段階に一つの住居遺構群のまとまり(ⅡB群)が占有した生活空間を、板付Ⅱ式土器新段階に三つの住居遺構群(ⅡAⅠⅡ群)が分割し、相互に他を排するように生活空間が確保されている。こうした生活空間の分割占有のあり方から、ⅡAⅠⅡ群の三つの住居遺構群のまとまりは、一連の系譜関係をもつ複数の世帯の集合体をあらわしていると考えられる。土器様式の空間的な変異をみると、板付Ⅱ式土器新段階には、ⅡC群はⅡD群と共通し、ⅡA・ⅡB群とは異なる甕Aと甕Bの出土比率をみせる。しかし、須玖Ⅰ式土器古段階には、甕AⅠ・甕AⅡ・甕Bの出土比率はともに共通している。さらに、時間的な変異も、甕形土器の底部aⅠgは各群ごとに出土分布の有意な偏りはみられない。つまり、ⅡAⅠⅡ群を営んだ三世帯は、生活空間を個別にもちながらも、土器づくりでは協業して、同じ土器づくりの伝統を共有した一つの集合体と考えることができる。

また、蓬ヶ浦遺跡C群でも、板付Ⅱ式土器中段階にC北群とC南群の二つのaパターンの住居遺構群がみられる。両者は、前段階の一つのaパターンの分布範囲を分割・拡大して営まれている。その間の土器様式の空間的な変異をみると、板付Ⅱ式土器中段階にはC南群はB群と、C北群はG群と共通した甕Aと甕Bの出土比率をしめすが、新段階には共通した比率をみせる。また、時間的な変異をあらわす甕形土器の底部aⅠgは、板付Ⅱ式土器中段階にはB・G群に対しては底部Ⅰが相対的に多いが(第22図①②)、C群内部では有意な出土分布の差はみられない。前田山遺跡のⅡAⅠⅡ群と共通した複数の世帯の集合体が考えられる。

このように、生活空間を個別にもつ世帯でありながらも、土器づくりでは協業して、同じ土器づくりの伝統を共有



第24図 合の原遺跡の竪穴式住居跡の配置(縮尺1/2,000)

する複数の世帯の集合体を考えることができる。しかし、生活空間を各世帯が個別にもつことは、各世帯を結び付ける紐帯が比較的緩やかであったことをしめしている。

次に、数軒の竪穴式住居跡が密集して営まれることがある。たとえば、蓬ヶ浦遺跡の板付Ⅱ式土器中段階／須玖Ⅰ式土器古段階のB群では、丘陵の中央付近に二つのaパターンの住居遺構群が近接して営まれている。福岡県筑紫野市合の原遺跡でも、須玖Ⅰ式土器古段階には三つ、中段階には四つのaパターンが近接して営まれている(第24図①・②)。

ところが、蓬ヶ浦遺跡のB群の各aパターンの住居遺構群の分布範囲は、継続的に固定していない。前述してきた世帯が継続的に個々の生活空間を占有するとは異なる。一つの世帯として一定の範囲を生活空間として認められるが、それが次の世代まで継続して占有されることはない。住居の建て替えは、二つの生活空間を東西に配置するという関係を保ちながらも、その都度空地があてられた可能性が大きい。土地の占有に、一つの世帯を越えた複数の世帯の集合体としての規制があったと考えられる。また、土器様式の空間的な変異をみると、東西二つのaパターン間の甕Aと甕Bの出土比率は、板付Ⅱ式土器中段階／新段階には同様な比率をしめす。また、時間的な変異をあらわす甕形土器の底部a-gは、板付Ⅱ式土器中段階／須玖Ⅰ式土器古段階を通じて、二つのaパターン間で有意な出土分布の偏りをみせることはない。東西二つのaパターンを営んだ世帯は、同じ土器づくりの伝統を共有し、土器づくりをもに行っていたと想定できよう。板付Ⅱ式土器中段階／須玖Ⅰ式土器古段階の蓬ヶ浦遺跡B群は、世帯の家族をその中にも含み、土器づくりの伝統を共有し、個々の生活空間の占有は、集合体としてのまとまりの中で規制されたものと言えよう。

このように、世帯の空間的・時間的なまとまりには、生活空間の占有形態と竪穴式住居跡の分布から三つの形がみられる。しかし、各まとまりの中では、土器様式の空間的・時間的変異には、違いが認められない一方で、それぞれ

のまとまりごとに個有の個性が認められる。そうしたまとまりごとに、個有の土器づくりの伝統が存在していたと考えられ、土器づくりの単位として捉えられよう。また、前田山遺跡や蓬ヶ浦遺跡などの集落遺跡が、そうした世帯の集合体を単位として当初から営まれ始めることから、土器づくりにとどまらず、各種の労働作業のもっとも基本的な単位であった可能性はつよい。

こうした世帯のレベルを越えたまとまりは、より高いレベルでの社会単位として捉えることができよう。時間的な継続の意味合いも含め、そうしたまとまりを「世帯群」と呼んでおこう。では、こうした世帯群は、どのように結び付き、一つの集落というユニットを作り上げていたのであろうか。

#### c 集落の構成とユニット

これまで弥生時代前期の集落は、小規模で数軒の竪穴式住居跡から構成されると考えられてきた。高倉洋彰氏は、かつて五軒を大きく前後しない程度の規模の「家族集団」が、単独で集落を構成していた可能性を指摘している<sup>52</sup>。ところが、近年の丘陵群全面にわたる広範囲な集落遺跡群の調査により、そうした集落のユニットと異なる姿が捉えられるようになってきた。

たとえば、すでに前田山遺跡と蓬ヶ浦遺跡の周辺の環境をみた際、板付Ⅱ式土器古段階と須玖Ⅰ式土器古段階の集落遺跡群をいくつかのグループにまとめた(第1・6図)。これらは、調査年度により、遺跡名が異なる場合もあるが、大小の谷などで地形的に区分される集落遺跡群のまとまりである。丘陵の各所で調査が進んでいる三国丘陵群では、かなり細かなグループリングが可能である。一グループは、半径二〇〇～二五〇メートルほどの範囲に住居遺溝群が分布している。蓬ヶ浦遺跡は、遺跡全体でそうした一グループにあたる。

ところが、稗田丘陵群では、前田山遺跡と下稗田遺跡を除くと、他の集落遺跡の実態は不明な点が多く、さらに細かくグループリングができそうである。ただし、前田山遺跡のⅠ地区とⅡ地区をあわせると、三国丘陵群でみた一グルー

プとしてくくられる集落遺跡のひろがりに対応する。しかも、遺跡の南側五〇〇メートルほどにある下稗田遺跡とは、大きな谷で地形的に切り離されている。また、北側に続く丘陵は、南北から小さな谷がはいり込み、鞍部となり、丘陵の幅は狭く、住居遺構分布は途切れるものと考えられる。こうした点から、前田山遺跡全体で、三国丘陵群上の集落遺跡の一グループに相当するものと考えてよからう。

さらに、蓬ヶ浦遺跡と前田山遺跡に代表される集落遺跡の一グループに含まれる世帯群の間では、部分的ではあるが、土器様式の空間的・時間的な変異のあらわれ方が、相互に共通する場合がある。たとえば、蓬ヶ浦遺跡の場合、板付Ⅱ式土器中段階のC群では、空間的変異をあらわす甕Aと甕Bの出土比率は、C南群がB群と、C北側がG群と共通する。須玖Ⅰ式土器古段階には、時間的変異をあらわす甕形土器の底部a-gの構成比は、遺跡全体で有意な差が認められない。

前田山遺跡でも、板付Ⅱ式土器新段階に、ⅡA-ⅡC群の中で、ⅡA-ⅡC群は甕Aと甕Bの出土比率は共通するが、ⅡB群は他の世帯群であるⅡD群と類似した比率を示す。

こうした土器様式の変異の部分的な共通性は、集落遺跡の一グループ内の世帯群の間で、相互に土器づくりの伝統が交流されていたことを物語っている。それは、土器のつくり手を含む人的な移動を含むものと考えられる。そうであれば、各世帯群は決して互いに没交渉で孤立した存在ではなかったと言えよう。

また、それぞれの世帯群に含まれる竪穴式住居跡の規模や袋状竪穴の基数に偏りがみられる。蓬ヶ浦遺跡の場合、B群では、西側aパターンの世帯は、板付Ⅱ式土器中段階から須玖Ⅰ式土器古段階を通じ、常に大小二軒の円形プランの竪穴式住居跡を一組として営まれている。大形のもの、直径四メートル前後、小形のもの、直径五メートルはかる。これに対して、東側aパターンの世帯は、直径四メートルの竪穴式住居跡を二軒一組で営んでいる。大形の住居を営むのは、B群でも西側aパターンの世帯のみである。さらに、これに匹敵するような大形住居は、C・E・

G群ではみられない。

加えて、袋状堅穴群のみからなるbパターンの住居遺構群は、板付Ⅱ式土器古段階には、B群に二つ、C群の一つに営まれる。中ノ新段階にはB群のみに一つ、須玖Ⅰ式土器古段階にはB群とC群にそれぞれ一つのbパターンの袋状堅穴群がともなう。しかし、各時期ごとに、その数を比較すると、袋状堅穴をもつとも多く営んでいるのはB群の世帯群である。

このように、B群の世帯群は、大形住居を営み、より多くの袋状堅穴を保有している。とくに、袋状堅穴の数の多さは、そこに貯えられた家財や食料の多さをあらわし、消費生活の面で、世帯群の間に階層性があったことが伺える。当然、それを背景として、B群はC・E・G群に対して、影響力をもつ世帯群であったことが考えられよう。

さらに、B群の世帯群は、土器様式の変異、とくに時間的な変異のあらわれ方の面でも中心的な存在である。板付Ⅱ式土器中段階から須玖Ⅰ式土器古段階にかけて、甕形土器の主体が甕Aから甕Bへと変換される。E・G群では板付Ⅱ式土器新段階に、C群でも須玖Ⅰ式土器古段階に、甕Bが五〇パーセント前後をこえ、甕形土器の主体となる。ところが、B群では須玖Ⅰ式土器古段階でさえ、甕Aが五〇パーセントをこえている。とくに、B群内の大形住居を営む西側aパターンの世帯では、甕Aが六八パーセントを占める(第16図)。もともと分布地域が異なり客体である甕Bの受容に対して、B群の世帯群、とくに西側aパターンの世帯の保守的な姿勢が読みとれる。

一方、甕形土器の底部a~gの中で、底部f・gは、底部a~cと底部d・gの中間的なものとして板付Ⅱ式土器中段階に登場する。両者が融合して生み出されたと考えられ、中期の甕形土器へ受け継がれる。そうした底部a~cから底部f・gへの変換は、板付Ⅱ式土器中段階~須玖Ⅰ式土器古段階に生じる。ところが、その変換は、B群では板付Ⅱ式土器中段階に底部e・fが登場し、新段階に達成される漸移的な移行がみられるのに対して、C群では須玖Ⅰ式土器a~cが姿を消すことで初めて達成されるという跛行的な移行がみられる。底部a~cから底部e・fへの

変換は、B群の世帯群を中心として進められたと考えられる。その点では、B群は革新的な世帯群である。こうした土器様式の変化の中で、保守的であると同時に革新的な姿をみせるのは、B群だけで、蓬ヶ浦遺跡の中で中核的な存在であったと言えよう。

前田山遺跡についても、ⅡAⅠⅡC群は、ⅡD群やⅠ区に想定される世帯群とくらべ多くの袋状堅穴群を営む。蓬ヶ浦遺跡のB群と対応する世帯群として想定できる。それはⅡB群の袋状堅穴から出土した石製の剣把頭飾りからも考えられよう。

このように世帯群の間には一定の階層性と、核的な世帯群の存在が想定される。前述したように、前田山遺跡と蓬ヶ浦遺跡は、それぞれ稗田丘陵群と三国丘陵群の中で、地形的に区切られる集落遺跡のまとまりの一つである。それを構成する各世帯群は、相互に緊密な関係をもつて結び付いていたことが考えられる。しかも、それは漫然としたまとまりではなく、求心力をもつ核となる世帯群を中心として営まれている。かなりはつきりとした輪郭をもつ集団を想定でき、こうした集落遺跡のまとまりこそ、一つの集落のユニットとして捉えることができる。

その場合、集落はかなり広範囲に世帯群が散在する景観をとる。その姿は、弥生時代中～後期の集落とはかなり異なつたものである。

#### d まとめ

さて、我々が比較的よく知る弥生時代中～後期の一般的な集落遺跡では、「経営単位」<sup>33</sup>・「世帯共同体」<sup>34</sup>・「家族集団」<sup>35</sup>などの概念で捉えられる五軒前後の堅穴式住居群が基本的な構成要素である。概念上の相違点はあつても、現象面では、そうした規模の堅穴式住居跡群が基本的な単位であることは動かないであろう。それが独立あるいは複数集めて一つの集落を構成する。たとえば、三国丘陵群の小郡市三沢栗原遺跡の中期末の集落は、そうした堅穴式住居跡群が、最低六単位で一つの大きな丘陵上にかなり密集した形で構成されている(第25図)<sup>36</sup>。また、古墳時代前期の集



第25図 三沢栗原遺跡の竪穴式住居跡の配置  
(矢印は出入口の方向 縮尺1/2,000)

落遺跡でも、引き続き同様な外観の竪穴住居跡群がみられ、外来系統の土器の受容の単位である。そうした点では、五軒前後の竪穴式住居跡群のまとまりは、外観的だけではなく、社会的な単位と捉えられる。

前述してきた板付Ⅱ式土器古段階Ⅰ須玖Ⅰ式土器古段階の集落では、蓬ヶ浦遺跡のB群の世帯群が、弥生時代中期以降の一般的な集落の構成単位と外観的に共通した形をとる。しかし、そうした構成単位が、複数集合して一つの丘陵上に集中的に営まれることはない。弥生時代前期を中心とする時期の一般的な集落は、周辺の一―二軒の竪穴式住居跡に住む小規模な世帯群を含み、かなり広い空間の中に散在する姿をとる。

むしろ、そうした姿は、福岡市早良区の四箇東遺跡一九八七年度調査・宮崎県日南市の平畑遺跡などの縄文時代後晩期の集落に共通しているようである。さらに、二軒の竪穴式住居を中心とする複合世帯の形は、水野正好氏が想定する縄文時代集落で二軒が一単位となるあり方とも共通している。弥生時代前期は、稲作が完全に定着した段階といえ、集落のあり方は、縄文時代以来の伝統の延長線上に位置付けられる。

しかし、周知のように、縄文時代の集落遺跡はかなり希薄な分布しかしめさない。それは、前述してきた稗田丘陵群・三国丘陵群で散在的ではあるが丘陵群全面に集落遺跡が展開する弥生時代前期の状況とはまったく異なっている。こうした縄文時代から弥生時代の変化は、稲作の定着に起因していると考えられよう。稲作を行うための協業システムは、縄文時代以来の集落のあり方を色濃く残存させながら、丘陵群の各所に集落を増殖させることで達成されたのである。

また、弥生時代中期以降の一般的な集落と共通する蓬ヶ浦遺跡B群の登場も、変化のあらわれである。そこでは、世帯群としての生活空間が継続的に占有される中で、世帯の存在はかなり希薄である。それは、世帯群としてまとまるための規制の強さのあらわれであり、散在的に周辺の丘陵上で生活を営む世帯群を含む集落の中核であるためである。あつたと考えられる。

そうした規制がはっきりした形ではたらき始めるのは、蓬ヶ浦遺跡ではB群に竪穴式住居跡群が密集して営まれ、

西側 a グループのみに大型住居が見られるようになる板付Ⅱ式土器中段階である。さらに、昨年調査された小都市一の口遺跡では、前期末(板付Ⅱ式土器新段階) ~ 中期初め(須玖Ⅰ式土器古段階) に、蓬ヶ浦遺跡の B 群に対応する二~三世帯から構成される世帯群が集住し、それを取り囲むように杭を打ち込んだ痕跡と考えられる小穴列が検出されている。一の口遺跡は、周辺の北松尾口遺跡とともに、三国丘陵群上の集落遺跡の一グループとしてまとめることができる。北松尾口遺跡では住居遺構群の分布密度は相対的に低い。蓬ヶ浦遺跡の状況から類推すれば、一の口遺跡に中核的な世帯群、北松尾口遺跡に周辺の小規模な世帯群が散的に生活を営む集落を想定できる。こうした一の口遺跡の杭列を、住居遺構群を取り囲む環濠にかわるものと考えれば、福岡市博多区板付遺跡などの「環濠集落」内部の住居遺構群の姿が類推できよう。板付遺跡の環濠は、それ以降にあらわれる「環濠集落」の最古の例として、板付Ⅰ式土器に位置付けられる。環濠内に中核となる世帯群が生活を営み、周辺の小規模な世帯群とともに集落を構成していたと考えるならば、前述してきた蓬ヶ浦遺跡の B 群に代表される集団関係が生まれる時期を、板付Ⅰ式土器の段階まで遡らせることができよう。そこに縄文時代から弥生時代への変化の一線を引くことができる。

### おわりに

本稿では集落遺跡から弥生時代前期の集団関係を考えてみた。しかし、本来は集落に住み暮らしていた人びとの最後の地である墓地との関係をも含めて考える必要を切実に感じる。その点では、本稿は不完全なものである。今後の検討課題としたい。

最後になったが、本稿は随分以前に九州大学九州文化史研究施設の研究会で発表した要旨を基本として、大幅な修正を加えたものである。これを発表するにあたり、九州大学九州文化史研究施設の横山浩一先生(現、福岡市博物館顧問)と、施設長の丸山雍成先生から、いろいろな御教示をいただいた。また、資料調査にあたり多くの方々にお世

話になった。とくに、蓮ヶ浦遺跡の調査担当者の片岡宏二氏には、かなりこまごまとした調査成果を教えていただいた。さらに、高野信治・宮崎克則には、筆者の非常に鈍い足取りに、叱咤・激励をいただき、どうにか最後までたどりつくことができた。以上の方々に記して感謝の意をあらわしたい。

〔註〕

- (1) 佐原真「大和川と淀川」『古代の日本』五 角川書店 一九七〇
- 都出比呂志「四 弥生土器の地域色」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 一九八九 ほか
- (2) 深沢芳樹「弥生時代の近畿」『岩波講座日本考古学』五 岩波書店 一九八七
- (3) 都出比呂志「五 土器の地域色と通婚圏」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 一九八九
- (4) 長嶺正秀編「前田山遺跡」(行橋市文化財調査報告書 第一九集) 一九八七
- 前田山遺跡については、筆者が発掘調査・整理作業に従事した際に作ったメモを参考とした。その他、調査主任の長嶺正秀氏、水島稔夫氏から多くの御教示を得た。
- (5) 長嶺正秀・末永弥義編「下稗田遺跡」(行橋市文化財調査報告書 第一七集) 一九八五
- (6) 註(4)・(5) 文献および次の文献を参考とした。
- 定村貢二「行橋市の遺跡」行橋市教育委員会 一九六三
- 竹並遺跡調査会編「竹並遺跡」東出版寧楽社 一九七九
- (7) 宮小路賀宏編「三沢蓬ヶ浦遺跡」(福岡県文化財調査報告書 第六六集) 一九八四
- このほか、調査の詳細については、調査を担当された一人である小郡市教育委員会の片岡宏二氏から多くの御教示を得た。
- (8) また、遺物の観察を行う上で、小郡市埋蔵文化財センターに協力をいただいた。
- 福岡県教育委員会および小郡市教育委員会から刊行されている発掘調査報告書によった。このほか、小郡市教育委員会の方々から各種の御教示を得た。
- (9) 田崎博之「須玖式土器の再検討」『史淵』 第一二二輯 一九八五
- (10) 註(9) 文献と同じ。

- (11) 註(9) 文献と同じ。
- (12) 註(9) 文献と同じ。
- (13) 註(9) 文献と同じ。
- (14) 註(9) 文献と同じ。
- (15) 研究史については、田崎博之「弥生土器の起源」『論争・学説日本の考古学』 第四卷 雄山閣出版 一九八六
- (16) 註(9) 文献と同じ。
- (17) 橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 XXXXI 福岡県教育委員会 一九七九
- (18) 山崎純男「層位学的方法」『季刊考古学』第一七号 雄山閣出版 一九八六
- (19) 岩崎次郎「2章 弥生遺跡の調査」『竹並遺跡』 東出版寧楽社 一九七九
- (20) 後藤直編「板付」(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第三五集) 一九七六
- この比率は一九六四年度に調査された地点の板付Ⅰ式土器古段階Ⅰ須玖Ⅰ式土器古段階の比率であり、全時期を通じて甕  
Aは数パーセントを占めるにすぎない。
- (21) 七田忠昭ほか編「町南遺跡」(佐賀県文化財調査報告書 第六八集) 一九八三
- (22) 小田富士雄ほか「亀ノ甲遺跡」 八女市教育委員会 一九六四
- (23) 中間研志・平島勇夫編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXIV』 福岡県教育委員会 一九七八
- (24) 中間研志編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告3』 福岡県教育委員会 一九八四
- (25) 酒井仁夫編『葛川遺跡』(刈田町文化財調査報告書 第三集) 一九八四
- (26) 註(4)・(5) 文献と同じ。
- (27) 森貞次郎「各地域の弥生式土器―北九州―」『日本考古学講座』 4 一九五六
- 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡―日本農耕文化の生成― 至文堂 一九六一
- 鏡山猛・杉原莊介・大塚初重「福岡県城ノ越貝塚」『日本農耕文化の生成』 至文堂 一九六一
- 出土比率は遺構の時期にあわせて算出したものであり、そのため一段階古い資料を含んでいる。
- (29) 鷲尾泰俊「日常のなかの統計学」岩波書店 一九八三
- (30) カイニ乗分布表は註(29)の文献の付表を利用した。
- (31) 木村幾多郎「北部九州の弥生時代貝塚」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 一九八二

- (32) 高倉洋彰「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』 東出版 一九七五
- (33) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第六卷第一号 一九五九
- (34) 都出比呂志「農業共同体と首長権」『講座日本史』一 東京大学出版会 一九七〇
- (35) 註32文献と同じ
- (36) 速水信也編『三沢栗原遺跡Ⅰ・Ⅱ』（小群市文化財調査報告書 第一五集）一九八三
- 片岡宏二編『三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ』（小群市文化財調査報告書 第二三集）一九八五
- 中島達也編『三沢栗原遺跡Ⅴ』（小群市文化財調査報告書 第二八集）一九八六
- (37) 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第一二〇輯 一九八三
- (38) 常松幹雄ほか『入部遺跡Ⅰ』（福岡市埋蔵文化財調査報告）一九九〇
- (39) 北郷泰道ほか『平畑遺跡』（宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第二集）一九八五
- (40) 水野正好「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第二一巻第三・四号 一九六九
- (41) 一の口遺跡と北松尾口遺跡については、小群市教育委員会の速水信也・柏原孝俊氏から御教示をえた。また、一の口遺跡の位置は、第6図-32（北松尾口2地点）の北東一〇〇〜二〇〇メートルの丘陵上にあたる。
- 〔補註〕「土器と集団」で、数字の校正ミスをいくつか発見したので証正しておく。
- 25ページ 16行目 須玖Ⅱ式土古段階↓須玖Ⅰ式土器古段階
- 42ページ 第14図(3)の円グラフ中の空白↓5
- 43ページ 8行目 三九パーセント↓八九パーセント
- 49ページ 10行目 六八パーセント↓六八パーセント